がっしん

佐用町

飢饉のことを佐用郡では、昔から「がっしん」と呼んでいますが、どんな文字を書くのか、誰に聞いてもわかりません。

いい伝えによれば、天明や天保のころには、佐用郡でもこのがっしんがたびたびあったそうです。

ある年の夏などは、稲が育つ七十日の期間中にたった六日しか晴天がなく、気温が低く雨が降り続いたので、米作はきょくたんに減り、金はあっても米が買えないので、小判をくわえたまま道に倒れて死ぬ人もあったといいます。

ある家でのことです。鍋の中へほんの少しのお米を入れて、白湯のようなお粥を煮たのを囲んで食事をしておりましたが、中の一人の子どもは、自分の茶碗の中へ箸を入れて、しきりに何やら探しています。ふしぎに思った母親が、

「お前、何さがしておるぞ。」

「茶碗の中に黒豆が二つ見えたので探してみたが、どうにも箸にかからんのぢゃ。」

「はて、お粥の中に黒豆を入れたおぼえはないが。」

と探(さが)してやりましたが、やはり何(なに)もありません。それもそのはず、黒豆(くろまめ)と見(み)えたのは、子(こ)どもの目玉(めだま)が映(うつ)っておったのでした。